

< 評価事例 >

【観点別評価の事例】

ワークシートの評価（数値記入欄） 【思考・判断】

評価	内 容
A	所定の箇所に記入のほかに、メモ等が記入できている。
B	所定の箇所に記入が正しくできている。
C	空欄の箇所がある。（記入箇所について、個別に指示または援助が必要である）

ワークシートの評価（感想意見記入欄）【技能・表現】

評価	内 容
A	実習の感想のほかに、税金についての自分の意見（感想）が書けている
B	自分の感想（税についてではなく、本時の授業内容についてのみ）が書けている
C	実習の事実のみの記入で感想がないまたは記入されていない。（感想欄は、事実のみではなく、感想や意見を記入することの指導が必要である）

印刷物の評価【技能・表現】

評価	内 容
A	指定されたことが正しく入力され、出力できている。
B	入力に誤りや不足があるが、出力はできている。
C	出力できていない。（集中して取り組ませ、時間内に完了できるように援助が必要である）

観察【関心・意欲・態度】

評価	内 容
A	指示された順序に、正しく入力している。
B	入力は正しくできているが、指示された順序ではない。
C	入力できていない。（説明を聞いていないので、聞かせることが必要である）

【成果と課題】

（成果）

- ・その都度、生徒の動きや学習活動について評価をすることができ、努力している生徒を評価することができる。
- ・評価の方法は単純な方が評価することが容易となる。

（課題）

- ・その時間中の評価項目として考えられていないことについて、どのように評価すればよいか不明となる。
- ・合計得点から評価への変換方法が定まっていない場合、観点別に評価した場合でも現行の評価と何らかわらない評価になる恐れがある。
- ・提出物の内容まで細かく評価することは困難なことが多い。
- ・評価の方法は単純な方が評価することが容易となるが、同じ評価となってしまう。

【単元における観点別評価の総括の事例】

（１）単元の時間数と評価の観点

観 点	第 1 次 ~ 第 3 次	第 4 次			評価回数	評価合計	単元評価
		第 1 時	第 2 時	第 3 時			
関心・意欲・態度					4		
思考・判断					1		
技能・表現					1		
知識・理解					3		

（２）単元における観点別評価の総括の事例

この単元の 4 時間すべての評価が、概ね満足できるの「B」であった場合の評価（生徒イ）

観 点	第 1 次 ~ 第 3 次	第 4 次			評価回数	評価合計	単元評価
		第 1 時	第 2 時	第 3 時			
関心・意欲・態度	B	B	B	B	4	B B B B	B
思考・判断				B	1	B	B
技能・表現				B	1	B	B
知識・理解	B	B	B		3	B B B	B

- ・全ての時間、「B」であるので、最終的な単元の評価も「B」と評価することが出来る。

この単元の4時間の評価に「A」、「B」、「C」が混在する場合の評価（生徒口）

観 点	第1次～ 第3次	第4次			評価回数	評価合計	単元評価
		第1時	第2時	第3時			
関心・意欲・態度	B	B	A	A	4	B B A A	A 1
思考・判断				A	1	A	A 2
技能・表現				B	1	B	B 3
知識・理解	B	A	B		3	B A B	B 4

単元における観点別評価の総括の考え方

この評価は、次のような基準で考えた。

- ・評価回数が1回の場合、この単元での評価は1度しかない。よって、評価した1回分がこの単元の評価となる。（2・3）
- ・評価回数が複数ある場合、単元内でも時間によって評価に差が生まれる。そこで、この単元の評価の回数を1時間中の授業の評価と考え、評価回数の半数以上の評価うち、高い方を優先すると考え、
 - 1は、評価回数4回 \div 2=2回（半分の回数）
 - 4回の評価のうち、2回がB、2回がAの評価であるので、良い方のAを評価とする。
 - 4は、評価回数3回 \div 2=1.5回（半分の回数）
 - 3回の評価のうち、2回がB、1回がAの評価であるので、半分の回数を超えるBを評価とする。

この評価方法で行った場合、全時間数の半分で評価するので、比較的に優しい評価になる可能性がある。

（生徒八）

観 点	第1次～ 第3次	第4次			評価回数	評価合計	単元評価
		第1時	第2時	第3時			
関心・意欲・態度	B	C	C	A	4	B C C A	B 5
思考・判断				B	1	B	B
技能・表現				B	1	B	B
知識・理解	B	B	C		3	B B C	B 6

- ・ 5は、評価回数4回 \div 2=2回（半分の回数）
- 4回の評価のうち、2回がC、1回がA、1回がBの評価であるので、良い方の評価は、1回のAと1回のBとなる。良い方だけに目を向けるとA、Bそれぞれ評価が1回ずつとなりAかBの評価で迷うところであるが、時間数の半分はCであるため、この生徒はBとする。これは、単元全体の評価としたときに、努力を要する部分を多く含んでいる生徒は、十分満足できるとは言い難いと考えたためである。
- 6は、評価回数3回 \div 2=1.5回（半分の回数）
- 3回の評価のうち、2回がB、1回がCの評価であるので、半分の回数を超えるBを評価とする。

（生徒二）

観 点	第1次～ 第3次	第4次			評価回数	評価合計	単元評価
		第1時	第2時	第3時			
関心・意欲・態度	C	C	A	A	4	C C A A	B 7
思考・判断				B	1	B	B
技能・表現				B	1	B	B
知識・理解	B	B	C		3	B B C	B

- ・ 7は、評価回数4回 \div 2=2回（半分の回数）
- 4回の評価のうち、2回がC、2回がAの評価であるので、良い方の評価は、1の考え方で行けば、2回のAとなる。しかし、前出の生徒八と同様に、この生徒も時間数の半分はCである。このため、この生徒はBとする。

（生徒ホ）

観 点	第1次～ 第3次	第4次			評価回数	評価合計	単元評価
		第1時	第2時	第3時			
関心・意欲・態度	B	A	B	B	4	B A B B	B 8
思考・判断				B	1	B	B
技能・表現				B	1	B	B
知識・理解	B	B	C		3	B B C	B

- ・ 8は、評価回数4回 \div 2=2回（半分の回数）
- 4回の評価のうち、3回がB、1回がAの評価であるので、多い方の評価は、3回のBとなる。

(生徒へ)

観 点	第 1 次 第 3 次	第 4 次			評価回数	評価合計	単元評価
		第 1 時	第 2 時	第 3 時			
関心・意欲・態度	C	B	A	A	4	C B A A	A 9
思考・判断				B	1	B	B
技能・表現				B	1	B	B
知識・理解	B	B	C		3	B B C	B

- 9 は、評価回数 $4 \div 2 = 2$ 回 (半分の回数)
 4 回の評価のうち、2 回が A、1 回が A と B の評価であるので、良い方の評価は 2 回の A となる。
 ここで、この生徒は A の評価になっている理由は、生徒二の場合とは違い、C の評価が時間数の半数に達しておらず、この単元の半分以上の時間数は、概ねまたは十分満足できる状態にあると評価できると考えたからである。

【まとめ】

- この評価は、総時間数の半数の評価を求めなければならないので、評価に手間がかかる。評価を、仮に A = 3 点、B = 2 点、C = 1 点 という点数に換算して、平均値または合計値を求め、その値から A、B、C に評価し直した方が簡単である。しかし、この平均値を求める方法によると、事例の生徒イ、へと二の【関心・意欲・態度】の評価は、
 (生徒イ) B B B B = 2 + 2 + 2 + 2 = 計 8 点
 (生徒へ) C C A A = 1 + 1 + 3 + 3 = 計 8 点
 (生徒二) C B A A = 1 + 2 + 3 + 3 = 計 9 点
 となり、生徒間の差がなくなるばかりではなく、日頃から努力しており、概ね満足と認められている生徒 (生徒イ) と、部分的ながんばりしか見せない生徒 (生徒へ) が同評価となる。個人の差を付けることにねらいを置いているわけではないが、日頃から努力している生徒と部分的にしか努力をしない生徒を同列の評価ではなく、それぞれについての評価をすることが観点別の評価の目的であるので、このような評価方法にするのがよいのではないかと考えた。
- 評価のしやすさを目的に、各評価項目を A、B、C の 3 段階とした。しかし、この単元を終えて、クラスの評価をしたときに、概ね満足の B の評価となる生徒が多くなり、差があまりつかなかった。評定は、5 段階であるため、最終的に生徒を 5 つの段階に振り分けるのであるが、評定中程の生徒が多数となり、上位の生徒が生まれてこなくなる可能性がある。また、学校によっては、進路指導などの目的のために、10 段階評定をつける場合がある。この観点別評価のまま評価すると、ほとんどの生徒が概ね満足の部分に集中し、5 段階よりもさらに 10 段階の評価が付かないまたは 10 段階の評価の意味をなさない可能性がある。観点別の単元の評価から、評定への換算方法について、学校によって設けられている 10 段階評定についても、学校の評価のシステム全体について考える必要があるのではないかと感じられた。